

わらべ歌一考察

A study of the Japanese children's songs

小岩井 きし子

Kishiko KOIWAI

第1章 はじめに

2003年12月、松本短期大学幼児教育学科1年生へ「子どもの頃に行った遊び」～子どもにとって遊びとは～をテーマにレポート課題を出した。このテーマでのレポート課題を出して30年以上になるがこの頃、子どもの頃に行った遊びをすぐに思い出せないと書く学生がいる。しかし、もっと驚いた事は、保育所、幼稚園での遊び（自由遊びではなく先生主導の遊び）をレポートした学生がいたことである。本来遊びとは、友人などと自分たちの好きな事を好きな場所で自由に遊ぶ事だと思う。今の若者は外で体を使った遊びを子どもの頃に経験していないのではないかと。夕方暗くなるまで遊ぶと言う事がなかったのではないかと思う。暗くなるまで楽しく遊んだ経験があれば、子ども時代の遊びを懐かしく思い出す事が出来ると思う。近年、確かにわらべ歌遊びを行ったというレポートは減っているが、1970年代の学生はいろいろなわらべ歌遊びを、兄弟、近所の友人など異年齢で遊んだレポートが多かった。H8年、親と子の子どもの頃の遊びの違いを知りたくて、松本市内の私立保育園で保護者にアンケート調査を行った。^{注1)}

結果は遊び場所も、遊び相手も、遊びの種類も親と子どもとでは違っていた。H8年は今の学生の小学校5年生位の時、幼児期の遊びが昔とはすでに変わってきていたと考えるとレポート結果もうなずける。レポートでは多くの学生が、今の子どもたちが外で遊ばなくなっていると書き、なかには2、3人で外にいてもそれぞれがゲーム機で遊んでいる姿を見たと言った学生もいる。今子どもが被害を受ける事件が多発しているので、親も子どもを安心して外で遊ばせることが難しいと思う。犯罪が多く起こる今、何が原因だろうか？昔のように、異年齢の子どもたちが、大勢で群れて遊ぶ事がなくなったからではないだろうか？又、世の中がなんとなく忙しく感じるのは私だけだろうか？子ども向けの音楽もテンポの速い曲が多い。童謡などの音楽も昔のレコードと近頃発売されたCDではテンポが速くなっているものもあると聞いた。昔の良いものを取り入れなくてはいけない時ではないか？そこで、学生たちが子どもの頃にわらべ歌遊びを経験したかどうか、そして、わらべ歌についてどう考えているかを知るために行ったアンケート、レポート、H8年に行った調査も参考に、わらべ歌について考えたい。

第2章 目的、方法、結果、考察

第1節 目的

永田栄一氏は「日本のわらべうた遊び」^{注2)}で伝承あそびは、本来は地域の遊び集団や家庭のなかで伝えられる子どもの文化である。と言い、伝承遊びのなかで「うた」を伴うものがわら

べうたであると言っている。また、佐藤志美子氏は「心育てのわらべうた」^{註3)}の「日本語がそのまま歌になっているわらべうた～文化伝承と係わって～」の中で、人間が文化を伝承していくのには、①言葉、②音楽（うた）、③身体語（ゼスチュア）の三つの要素がいる。そして、わらべうたが、この三つが常に一体となっているところに、文化伝承のうえからたいせつな役割を持っているといえると述べている。わらべ歌遊びはたくさんあるが、今回は、ポピラーな手遊び、鬼ごっこ、縄遊び、まりつき、ゴムとび、ケンパなど18個をあげ、その遊びを行った事があるか、又、どこでそれを行ったかを調べる。そして、今、学生たちはわらべ歌に関してどう思うかを知る。

第2節 方法

1. 方法

アンケート、レポート

2. 対象、調査年月

2004年1月、松本短期大学幼児教育学科1年生66名

2004年12月、松本短期大学幼児保育学科1年生98名

第3節 結果

1. わらべ歌あそびの経験の有無

遊 び	保育所幼稚園	児 童 館	学 校	家
おちゃらか	52%	2%	49%	46%
おせんべいが焼けたかな	49%	2%	74%	40%
ずいずいずっころばし	45%	2%	62%	51%
かごめかごめ	72%	4%	63%	16%
花いちもんめ	67%	2%	68%	16%
通りゃんせ	35%	1%	26%	10%
あずきあずき	31%	3%	25%	10%
だるまさんがころんだ	76%	8%	77%	45%
竹の子一本おくれ	4%	0%	3%	1%
狩人さん	4%	0%	4%	1%
ケンパ	60%	7%	61%	44%
ゴムとび	21%	4%	47%	29%
くまさん（縄遊び）	11%	0.6%	23%	8%
おじょうさん（縄遊び）	35%	4%	60%	23%
大波小波（縄遊び）	46%	6%	62%	29%

遊 び	保育所幼稚園	児 童 館	学 校	家
回覧板（縄遊び）	6 %	1 %	1 4 %	4 %
郵便やさんの落とし物（縄遊び）	5 7 %	5 %	7 7 %	4 3 %
あんたがたどこさ（まりつき）	4 0 %	2 %	6 3 %	5 3 %
<ul style="list-style-type: none"> ・家で上記の遊びを遊んだ事のない学生は15%。 ・上記以外の遊び（アルプス一万尺、お寺の和尚さん、いっせっせ、21えーもん、一本ぶり、サラスパの歌、茶摘、りんご、茶々つぼ、いろはにほへと等の記入あり。） ・幼児保育学科の学生には児童館の項目も設けた。 				

2. わらべ歌についてどう考えるか？

- ・歌詞やメロディーが覚えやすく、子どもがすぐに歌えるもの。
- ・昔からあって誰でも知っているもので、遊びとしても使える。
- ・長時間保育だったので園長先生とたくさん歌い経験した。いつの間にかたくさんの歌を覚え、不思議。
- ・おばあちゃんから教わったものもあるが、いつの間にか覚え、ずっと覚えている。
- ・覚えさせようとして教わったのではないのに、今でも覚えていて、少し、懐かしい。
- ・歌を歌いながらやるので、家族とも、友人とも出来、楽しかった。
- ・一人では出来ない。手をつないで行ったり、遊びを知らない子どもも仲間に入り、すぐに覚えられるもの、人間関係が作られる。
- ・母や祖母が歌ってくれたが今自分で歌うと懐かしい。
- ・昔の言葉使いや方言、情景がわかる。
- ・歌を歌いながら一緒に遊んだ楽しい気持ちがあった。歌は単純ですぐ覚えられるし、歌に合わせて体を動かすのが楽しい。親や友だちと遊びを共有できると思う。
- ・歌いやすく、優しい気持ちになれる。地方独特のものもあり、歌詞の意味を理解するのも楽しみの1つではないか？
- ・決まったルールがあり、覚えやすい。そして遊んでいるうちに、自分たちでルールを変更して遊ぶ事が出来る。
- ・「子守歌」をイメージするので、落ち着く、ゆっくりの曲調な感じがする。
- ・独特な節回しがとても親しみやすく好き。親子のかかわりの持てるもの。
- ・親から子へ伝えるもの、遊びも自分以外の人と時間、遊び、感情を共感できるもの。
- ・かくれんぼにおいても「もういいかい」「まだだよ」にメロディーがつく。小さい時のわらべ歌遊びは楽しい記憶として残っている。
- ・今聞くと懐かしい気持ちになるが改めて歌詞を見ると難しいものや怖いものもあり、興味深く面白い。
- ・今、あまり、子どもがやっているところは見ないので減少してきているのではないか？
- ・今の子どもの遊びは、NHKでやっている子ども向け番組を通して親しんでいる。
- ・核家族が増え、又、外で遊ぶ事も減って歌い継がれるわらべ歌が少なくなっている。
- ・意味は分からないけれど、面白い言葉の響き、リズム等に魅力を感じて楽しんでいるように、子どもたちが遊んでいるのを実習先で見た。面白さを伝えたい。

- ・歌の内容が恐ろしいわらべ歌を、子どもが楽しそうに歌っているのは怖いと思う。
- ・昔からの伝統的なものもあるので、受け継いでいきたいと思う。
- ・曲調がどこか懐かしい雰囲気があり、日本の昔の暮らしぶりが見えるものもある。
- ・今の子どもはあまりわらべ歌を知らないと思う。興味を示す子も少ないのではないかな？今の歌とは違う点もあると思う。
- ・実習先では1度も見なかった。少しずつ伝統が薄れてきているのかと寂しく感じた。
- ・自分で歌ったりしたことはあまりない。歌は悲しいような感じがする。

3. H8年調査結果（下記の10個の遊びを遊んだ事があるか問う）

遊 び	園 児	保 護 者
おちゃらか	24%	62%
ずいずいずっころばし	28%	86%
かごめかごめ	34%	90%
花いちもんめ	21%	90%
通じゃんせ	10%	83%
あずきあずき	21%	31%
ケンパ	28%	69%
ゴムとび	24%	72%
郵便やさんの落し物	28%	72%
あんたがたどこさ	7%	76%

4. 考察

家でわらべ歌あそびをしたことがない学生が15%いた。「竹の子1本おくれ、狩人さん、くまさん、回覧板」はやったことのない学生多い。「おちゃらか、おせんべい焼けたかな、ずいずいずっころばし、だるまさんがころんだ、縄遊び」など少人数でも出来る遊びは家でも遊んだ%が高かったが、多人数で遊ぶものは%が低い。家では、遊ぶ仲間の人数が少ないことがこの%からも分かる。H8年の調査で、10個あげた遊びを保護者は「あずきあずき」以外約70%以上の人がやったことがあった。私も子どもの頃に「あずきあずき」は遊んだ事がなく、松本地方では、近年流行ってきたものではないかと思う。今、児童館がかなりの地域で整備されたので、幼児保育学科の学生にはこの項目も設けたが、児童館でのわらべ歌遊びは少ない。「かごめかごめ、花いちもんめ、通じゃんせ、あずきあずき」以外では、保育所・幼稚園より、学校で遊んだ%が高い。この結果には少し驚いた。今、ゆとり教育と言われているが、小学校ではこのようなわらべ歌遊びは行われているだろうか？夏、水泳の時、プールサイドで体を温めながら、「おせんべい焼けたかな、ずいずいずっころばし」等をやったと書いた学生が多かったが、今、この2つと、大縄跳びでの「郵便やさんの落し物」などしか遊ばれていないのではないだろうか？休み時間などはどうなっているのか。邦楽が学校の音楽教育に取り入れられるようになったが、本当の「ゆとり教育」が行われているだろうか。

第3章 まとめ

わらべ歌を学生は、いつの間にか覚えたり、祖父母から教えてもらったりしている。覚え易く、曲調も懐かしく、落ち着くと感じる学生もいる反面、歌詞は難しく、怖いものもあり、楽しそうに歌っている子どもの姿を怖いと感じる学生もいる。また、わらべ歌の伝統を受継いでいきたいという学生もいるが、今の子どもはわらべ歌を知らないし、興味を示す子どもも少ないのではと言う学生もいる。

前述の永田栄一氏は同著中の「遊ばせうたとわらべうた」で「日常的なことばがうたのように表現されることは、母親の赤ちゃんに対する語りかけによく見られ、子どもはそのような音感に包まれて育っている」。「いないいないばー」「たかいたかい」「あんよはじょうず」など子どもに対する大人の心からのうたであり遊ばせうたと呼ぶことができると述べている。H15年10月10日の朝日新聞に「赤ちゃん笑ってますか」という記事が載った。最近、保育の現場で、抱いてもあやしても笑わない赤ちゃんが目立ち始め、保育関係者が実態を調査。少子化と核家族化が原因ではないか、以前は、周りの大人や兄弟が自然と「れろれろー」と巻き舌をしてあやしたり、くすぐり遊びをした。今の親はそういうやり方を知らない。そこで、ワークショップ「笑いが生まれる親子のふれあい遊び」を開いた。子どもを笑わせる遊びを知ってもらおうのが狙い。継続的に調査を実施すると同時に、各地でワークショップを開く予定という。

子どもたちが遊びに入れてもらう時、音程とリズムとメロディーをつけ「いれて」と歌って仲間に入れてもらったほうが、無言で遊びに加わるよりすんなりと仲間入りができるという研究があったが^{註4)}、外国では日本のこのような風習がないようだ。かくれんぼをする時も、「かくれんぼするものこのゆびとまれ」「もういいかい、まだだよ」。そんな事をして良いのという時の「いけないんだいけないんだ」の囃子歌。どれも、音程、リズム、メロディーがついて歌われる。昔は、友人の家に行き遊びに誘うため「00ちゃん遊びましょ」とうたった。(今は玄関にはチャイムがあり、電話があり、そんな風景は見られなくなったが。)それら、ごく自然にうたうように唱えるもの、これがわらべうたのはじまりである。うたと意識しなくても、日常的なことばや遊びの表現に、ごく自然に音程やリズムが生まれ、わらべうたは大変身近なところにある。

日本の音楽教育は明治以来西洋偏重の歴史であった。わらべうたは卑俗なものだから文明開化の新しい時代にはふさわしくないと抹殺され、小学唱歌が作られた。しかし、「小学校唱歌校門を出ず」と言われ、当時、子どもたちは学校の外では、わらべうたで遊んでいたのである。小島美子氏は「歌をなくした日本人」^{註5)}の著書の「音楽はむずかしくてできないもの？」の中で次のように述べている。

この間、ある県で開かれた幼稚園と小学校の音楽教育研究会に出席させていただいた。幼稚園の子どもたちの生き生きした顔に対して、小学校の子どもたちが音楽の授業に見せるシラけた顔がとても気になった。その時の先生方の説明文には次の文章があった。「音楽はむずかしくてできないものだ」とあきらめて、やる気のない児童が多かった」私は、やっぱりそうかと思った。やる気のない児童ならシラけた顔をしているのは当たり前だ。それにしても「音楽はむずかしくてできない」とは、ほんとうにおかしいことだ。日本人は昔から歌も踊りも大好きで、伝統音楽などは、この小さな島国にはまったく珍しいほどたくさんの種類の音楽や芸能がある。種類の多さというとヨーロッパの音楽などメじゃない。

それに小さな子どもたちをよく見ていると、実によく歌っている。テレビで覚えた歌、母親やお姉さんたちが歌っている歌もよく歌っているが、その時その時でひとりごとみたいにいいたいことを勝手なふしで歌ったり、友だちに歌いかけたりしている。たまたま聞いたものだが、メロディも音程もはっきりしていて拍もきちんとあった。（レで終止、ことばに近い抑揚で強弱もなく、地声で歌うのは日本人にとって一番自然な歌であり、大切な音楽の芽生えである。）誤った音楽教育で、こういう芽生えをつみとったり踏みつけなければ、即興的に歌詞やメロディを断片的に作る能力を自然に身につけてゆく。だから音楽教育は、その無意識の子どもたちの行為をはげまし、その断片的なものを組織的なものにしていく手伝いをし、さらにそれを広げてやるという事ではないか。幼稚園の方が子どもの自然の成長をずっと大切にして、それに沿って音楽教育する伝統があるからではないかと、私はひそかに思った。そして、近代日本が西洋の音楽を音楽の中心に据えたのは大きな不幸ではなかったろうか？と述べている。

また、小泉文夫氏は「音楽の根源にある者」^{註6)}「わらべうたはどのようにして育ってきたか」の中で「現代っ子はわらべうたを知らない」と多くの人が思っている三つの理由を次のように述べている。

第一は、大人が「わらべうた」という時、自分が子どもだった時にうたった歌を憶い出し、その歌を子どもが知らないで早合点する。そういう大人は、「人工衛星飛ばそう」という遊びや、「かぼちゃの種をまきました（お寺の和尚さん）」などという新しい手合わせ歌を知らない。第二は、遊びの時間、遊ぶ場所がなくなった。しかし、一人で遊べるあそび、絵かき歌などのわらべうたを子どもは知っている。第三の理由は、大部分のわらべうたの音楽性が古い伝統と結びついた五音音階であり、単純なリズムによっているため、新しい時代の感覚にマッチしないように思われてことである。現代の大人が受けてきた音楽教育も、子どもたちと同様、伝統音楽と関係ないものであった。日本で多くのわらべうたが残っているのは、むしろ子どもを取り巻く音楽的な環境が、あまりに子どもの自然なリズム感、平易な音感覚、日本語にマッチした旋律から遠いために、自分たちで創り出さなければならない状況におかれているからだと考える。と述べている。

わらべ歌の中には学生が言うように、今の時代に合わない歌詞のものもあると思う。しかし、日本の伝統、文化などを考えても、少しでもわらべ歌を子どもたちに残しておきたいと思う。私の育った地区には子どものお庚申という行事がある。これは、2ヶ月に一度、夜、子どもがお庚申仲間の当番の家に行き、お庚申という行事を行う。昔は、鐘を鳴らして、歌いながら、子どもたちを呼んで、当番の家に行った。そして、その行事ではその歌を10回歌った。楽譜1)

松本には三九郎という行事がある。これは、今も、柳の木に繭玉の形のだんごをつけたものを焼きに来るように、歌を歌って呼びに来る。楽譜2)

もう1つ、私にはお庚申で忘れられない遊びがある。それは、「さらばた」楽譜3)。お庚申は小学校1年生から6年生までが参加できることになっていて、私の子どもの頃は、15人くらいの子供たちが集まり、お菓子を食べ、そして遊んだ。「さらばた」は子どもたちが円になり、豆（昔、お庚申ではお米、大豆を煎ったものをお供えしていて、子どもたちが家に帰るときはおせんべいと大豆の煎ったものなどがお土産だった。）を歌に合わせて回していく遊び。鬼が1人いて、他の人は左手を上にして軽く握り、右手を1拍目自分の左手、2拍目は隣の人の左手に、歌に合わせて置き、豆を回していく。歌が終わったところで誰が豆を持っているか

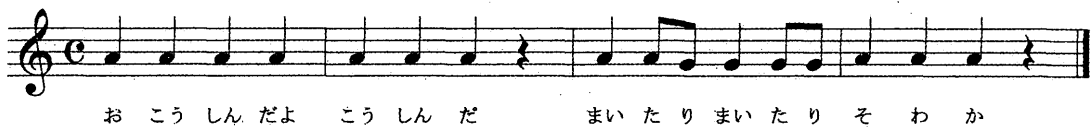
を鬼が当てるもの。この「さらばた」は遊びとしては今でも楽しく遊べるものであるが、歌詞の意味が分からず、私は自分の子どもにも伝える事ができなかった。この遊びはどこから伝わってきたものか。日本わらべうた全集13長野・岐阜のわらべうた⁷⁾には載っていないが、わらべうた音楽の理論と実践⁸⁾などには、題は同じで、メロディー、歌詞が少し違うのは載っている。「さらばた」の意味が分からないし、「静に渡す黄金のゆび」も「静に渡す黄金の指輪」なのか、「静に渡す黄金の郵便」ではないのかなどとも思う。いずれにしても歌い継がれるなかで、語尾が消えたり又、各地の方言が入ったのではないだろうか。今の子どもにも通ずる替え歌としてでも残しておきたいと今更おもう。今、お庚申に来るこどもたちは10人以下で、その遊びも男女別々、カードとかトランプ遊びで、「さらばた」などのわらべ歌遊びをする姿は見えない。

遊びで子どもたちに必要なものは、遊びの時間と空間と仲間であるという。しかし、今、この3つともなくなってきた。子どもの頃に遊ぶ事が大切であるということは誰でも思う事である。家に帰って遊ぶ事ができないとなると、保育所、幼稚園、児童館、小学校などでの遊びが重要となる。私は、保育所、幼稚園などでの自由遊びの時間、ごっこ遊びなどの時の子どもたちのひとりごと、自分で何気なく歌っている作り歌などで、劇遊びができればどんなに良いかと思っている。いずれにしても、残す事のできるわらべうたはひとつでも多く残していかななくてはとその感を強くした。

楽譜 1) 採譜 小岩井

お庚申

わらべうた



楽譜 2) 採譜 小岩井

三九郎

わらべうた



楽譜 2) 採譜 小岩井

さらばた

わらべうた

さ ら ば た さ ら か く し て し ず か に わ ー た す こ が ね の

8
ゆ び お に の し ら ぬ ま あ に だ あ れ だ あ れ

「注」

- 1) 松本短期大学研究紀要第7号 P13～P26 H10年
- 2) 永田栄一著 日本のわらべうた遊び 音楽之友社 S62年
- 3) 佐藤志美子 心育てのわらべうた ひとなる書房 1997年
- 4) 科学朝日 朝日新聞社 P18～23 1992年6月
- 5) 小島美子 歌をなくした日本人 音楽之友社 1998年
- 6) 小泉文夫 音楽の根底にあるもの 平凡社 2001年
- 7) 町田等他著 日本わらべ歌全集13長野岐阜のわらべ歌 柳原書店 S56年
- 8) フォライ・カタリン著知念編畑玲子訳 わらべうた音楽の理論と実践 明治図書 P185
1994年